

小学校社会科教師に必要な資質・能力とその形成要因

Qualities and Abilities Necessary for Elementary School Social Studies Teachers and Their Formation Factors

須本 良夫・鬼頭 和希

SUMOTO Yoshio・KITO Kazuki

[キーワード Keyword]	社会科教育, 小学校教師, 教師力,
[所属 Institution]	岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University) ・名古屋市立大須小学校 (Nagoya City Osu elementary school)

[要 旨 Abstract]

「令和の日本型学校教育」が語られる中、我が国の教育の現状を見渡せば、決して十分な余力があるわけではないことが、社会に流れる情報から垣間見ることができる。それゆえ教師個々の専門性や、学校組織全体で教師の資質・能力の向上は教育現場へ喫緊の課題として求められるようになってきている。本研究では大学の教員養成から定年を迎えるまで、小学校社会科を専門に研究している教師自身、どのような資質・能力を必要とし、その向上を心掛けているのか4人の異なる世代の社会科教員を対象に、質的調査として聞き取を実施し、その語りの分析・考察を行った。調査対象は、新規採用一年目教員から、現役管理職まで世代・所属学校を分け、資質・能力向上となった契機を振り返るというものである。4人の語りからは、小学校社会科教師に求められる資質・能力の契機となるのは、研究授業が大きな要因となっていることが見えてきた。しかし、昨今の社会事情において、研究授業、研究会そのものが限定的なものとなっている情勢もある。教師として、さらに小学校社会科を専門とする教師としては、多様な資質・能力が求められる今、教師自身が主体的に資質・能力を向上させる意識をもつ必要があることが見えてきた。

1. はじめに (問題の所在)

1.1. 理想と現実の狭間で求められる資質の在り方

社会では新型コロナウイルスで悩んでいる時期に、中央教育審議から『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)』(2021)が出された。本答申は、Society 5.0時代の到来といった急激に変化する時代にあって、子供たちが育むべき資質・能力とは何かが次のように定義され、これからの教育に関して包括的なまとめがなされた。⁽¹⁾

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

当然、学習指導要領との連動も意識されたものとなっており、これからの学校の姿のキーワードとしては学習指導要領にも取り入れられている「個別最適な学び」と「協働的な学び」が二本柱として盛り込まれている。これだけでも、これまで一斉授業や伝統的な教育技術によって行われてきた効率的に知識を伝達することを目指してきた日本型の教育観からの脱却が伺え

る。しかし、多くの教育課題を抱える学校現場教師に果たして答申の意図は届くのであろうか。

1.2. 「令和の日本型学校教育」の不安定さ

「令和の日本型学校教育」答申に書かれている中身は、すべての子供を主役におき、一人一人の学びに合わせた教育を前提としてまとめられている。特に社会全体にICTが普及し、その工夫や活用が可能になったことで、新しい教育を社会が受け入れやすくなったということは大きい。しかし、今までできてなかったことが、今からできるのかという疑問が沸いてくる。

「令和の日本型学校教育」答申においても、

- ・子供たちの多様化
- ・学習意欲の低下
- ・教師の長時間勤務による疲弊
- ・情報化の加速度的な進展に関する対応の遅れ
- ・少子高齢化、人口減少の影響
- ・「新型コロナウイルス感染症の感染拡大により浮き彫りとなった課題

という大きな教育課題が指摘されている。各項目を詳細に見れば、その問題が多義にわたり、教師が一人の頑張るものではなく、学校・教育委員会・行政でしか解決できないことも多い。そこで、中央教育審議会で

は先の答申に続いて『「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会中間まとめ』(2022.10.5)⁽²⁾において、教師及び教職員集団の姿に関し今後の改革の方向として、次の3点をまとめた。

こうした取り組みが、すべての学校・教職員にい

◎「新たな教師の学びの姿」の実現

- ・児童たちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)を転換し、「新たな教師の学びの姿」(個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じた、「主体的・対話的で深い学び」)を実現
- ・養成段階を含めた教職生活を通じた学びにおける、「理論と実践の往還」の実現(理論知(学問知)と実践知などの「二項対立」の陥穽に陥らない)

◎多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成

- ・教師一人一人の専門性の向上と、多様な専門性・背景を有する人材の取り込みにより、教職員集団の多様性を確保し、学校組織のレジリエンス(復元力、立ち直る力)の向上
- ・学校管理職のリーダーシップの下、心理的安全性を確保し、教職員の多様性を配慮したマネジメントの実現
- ・「学校の働き方改革」の推進

◎教職志望者の多様化や、教師のライフサイクルの変化

- を踏まえた育成と、安定的な確保
- ・多様な教職志望者へ対応するため教職課程の柔軟性の向上
- ・産休・育休取得者の増加、定年延長など教師のライフサイクルの変化を前向きに捉え、採用や配置等を工夫

きわたれば、確かに一人一人の教師として資質・能力は高まるであろう。しかし、教員養成の在り方や大量退職や採用倍率の低下などによる教師不足の問題、免許更新制度の廃止に代わる有益な研修の在り方などと、今後も取り組まねばならない課題は残っているのが現状であるし、専門性の向上と働き方改革など現場教師の知恵が試されるような提言となっている。

そこで、本稿では改めて小学校社会科教師が教科の専門家として、資質・能力の向上をいかに果たしてきたのか実際に聞き取り調査から明らかにし、少しでも現状の問題への解決の一途となれるよう考えていきたい。

2. 小学校社会科教師として必要な資質・能力を探る

2.1. 教師としての資質・能力

「令和の日本型学校教育」答申においては、上述の通り教員集団の在り方が求められている。これは教育界に向けて突然の進言ではなく、例えば中央教育審議会答申(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質・能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」⁽³⁾や、中央教育審

議会答申(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質・能力の総合的な向上方策について」⁽⁴⁾においても、これからの時代の教員に求められる資質・能力の育成がまとめられている。それぞれの提言でも時代や環境要因の変化の中での教師や学校のイメージに合った資質・能力の育成像が描かれ、指導要領を学校全体で確実に実施する集団の在り方がまとめられている。答申としては当然であるが、本当に答申に対応した形で学校は変革し、教師個々の資質・能力は時代に合うよう育成されてきたのだろうか。

教師に求められる資質・能力とは、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・子供・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養など実践に必要な不易な指導力は基盤と備えておかねばならない。それだけでなく、近年求められる教師の資質・能力には、変化の激しい社会を生き抜いていける人材育成が重要項目となっている。例えば教師自身が時代や社会、環境の変化を的確に把握し、ICT活用や特別支援教育、外国語教育の提供など、新たに学ばなければ対応できないことが求められている。そのためには教師一人一人が多様な要求に対する自己の資質・能力を高める意識をもち続けなければならない。半面、学校現場を取り巻く労働環境の問題は複雑さを増し、研修内容の理解や時間確保、保護者対応や児童・生徒指導など、学校全体を俯瞰すれば個々の教師の学ぶ意欲と余裕の少なさの方が、資質・能力の向上意識を上回りかねない現状である。

2.2. 教職に関わる教師の成長

教師が児童・生徒の成長へむけ、教職に対する責任感が必要なこと言うまでもない。教職という大枠で小学校・中学校という義務教育段階で、教職へ向かう責任という部分において特別な違いはない。

それでも小学校教員の場合、入学時の6歳から12歳までの幅の広い発達への対応と、現状学級担任制が機能している部分が良くも悪くも多いことがその特性として挙げられる。学校内においても、発達に合わせた実際の指導に関わる面では、低学年と高学年の集団ではずいぶんと異なる点も多い。近年では専門性が少しで活用できるように、学級担任と教科担任制を併用して施行している学校も多くみられる。しかし、教科の限定や、学校の実情から教科担任が設置というような場面では、依然として学級担任が多くの教科指導を行っているという学校も多い。また、中学校では思春期

特有の一人一人の個とそれを取り巻く人間関係の複雑さという生徒の内面への対応や高校入試という現実的な進路への対応問題というような、小学校とは異なる特別な資質・能力の要求もある。

教員配置の人事交流が校種を超えて行われる岐阜県の場合、上記のような学校種独自への対応も踏まえながら「岐阜県『教員のキャリアステージ』における資質の向上に関する指標」(2018)から更新し続け、小・中学校版としてほぼ同じ指標をまとめている⁽⁵⁾。指標では、教職キャリアをスタートラインから、基礎形成期・資質向上期・資質充実期・資質貢献期の4期を設定し、それぞれ観点として学習指導、生徒指導、経営・分掌の三分が設定された資質・能力の指標とされている。この指標は文部科学省が、教員一人一人へ教職キャリア全体を俯瞰し、現在の立ち位置においてが身に付けるべき資質・能力を目指せるような指標作成を教育委員会に求めたものである。教職の採用時の競争倍率の低下や教員数の不足など社会的にも問題が指摘される教職であるからこそ、教員の資質・能力の育成を長期的に俯瞰でき、よりよい教職の在り方を示すことは、現教職に携わっているものだけでなく教職課程に在籍するもの学生へも指針となる。

そうした中、中田正弘は小学校教師が身に付けるべき資質・能力とは何かということについて、新人教師、現職校長、元校長というキャリアの違う3世代を対象としたアンケート調査を行っている⁽⁶⁾。「教師の使命感等」「子供理解・学級経営等」「教育課程」「学習指導・教材研究等」「その他」という分類で全60項目の質問項目を各世代の教師に自己評価を求めた。また、別惣淳二、岩田康之らは研究では⁽⁷⁾、小学校教師の資質・能力に関して到達度を中心に、小学校教師に必要な資質・能力形成についての意義を示している。この研究の中での調査は、「子供の理解力」「子供に対するコミュニケーション」「企画・計画力」「学習指導力」「評価力」「学級経営力」「生徒指導力」「教職意識」「自己改善力」「連携・協働」という10項目の資質・能力について、各項目について5段階で自己評価をしている。こうした小学校教員としての使命感や子供理解・学級経営、学習指導に必要な教材研究や指導案作成能力、発問・指示・説明といった資質・能力を必要としている。

2.3. 小学校社会科教師としての資質・能力

これまで述べてきた小学校教師としての資質・能力をまとめれば、教師全体に備えたいものといえる。

では、教科指導の場面において他教科と比べた時、

社会科固有な教員の資質・能力はあるのだろうか。

多くの公立学校で勤務する小学校教師は、社会科の授業の実施を考えると、授業構想をする際におおむね次の6点を何らかの方法で点検し、授業へ備え、時には指導案に書き起こすという作業を行っている。

- ・学習指導要領の分析・目標の確認
- ・扱う社会諸科学・教科書の対応研究
- ・地域の実態調査や子供の意識の把握
- ・教材の選択、先行研究の吟味
- ・学習目標の設定、単元計画の決定
- ・知識、学習問題(課題)、発問の整理

日々の授業のように指導案にしない場合、教科書を中心に展開する授業者も多い。その場合も教科書そのものが検定を通過しているため、潜在化しているが学習指導要領に準拠した授業を意図せずに行っていることになる。

こうした一連の中で、他教科と異なり社会科教師特有の要素として、次の3点が挙げられる。社会科教師特有の力の一つ目は、情報の収集能力とその操作能力である。社会の中から社会的事象を教材として取り扱うためには様々な情報を収集し、管理し、授業レベルに落とし込むという一連の情報操作力が求められる。他教科の教員も持ち合わせ行っているが、社会科教員は社会的事象を授業へ転化できるフィルターを精緻化し、日々の生活の中でも絶えずそうした情報収集・操作力を研ぎ澄ましている特殊性があるといえる。

情報操作は、二つ目の授業構想力へと連結していく。社会科授業原理は多様であり、社会科の授業に対する明確な考え方を根底に備え、授業原理を用いた授業を構想しなければならない。教師が学習指導要領に従った授業が展開できるようになるのはもちろんだが、時には学習指導要領も批判的に乗り越え、そもそも学習する意味を知ろうとしなければ、いくら情報を収集し、教材化を行なったとしても、子供に適切な学びの意味を伝えられないかもしれない。それを防ぐには教師自身が、社会科教育の基礎理論を幅広く備えておく必要があるし、小学生が社会を自由に発見でき、気付くことのできる多様な授業方法を身に付けることである。

最後に社会科授業を分析し、評価する授業省察力である。省察する際には授業の構想と実践が綿密に行なわれていることが前提とされる。その上で教師自身も気づけなかった社会の変化を子供たちの発想から学び、内省することで授業力の更なる向上の糧とすることである。時に教師自身の教材研究の甘さや未熟さを子供達が突きつけることさえある。そうした意見も真摯に

省察し、単なる授業の評価に留まらず、更なる教師の資質向上のため、他者との省察も取り入れるなど大きな視点で評価を行うことが必要である。

こうしたこれまでの社会科教育の研究の成果^{(6)~(7)}を基に、後に述べる質的調査の項目の参考とし、現職教員にインタビューを試み、現職教諭の考える小学校社会科教師に必要な資質・能力の内実を調査する。

3. 小学校社会科現職教員による聞き取り

3.1. 聞き取り教員の属性

本研究では、小学校現場において社会科を専門と掲げている教師4名にインタビュー調査を実施した。小学校教員は、学校の実情で専門とする教科も変わることが求められることもあるが、本研究では小学校社会科教師の教科指導における資質・能力の内実とその形成要因を明らかにするため、社会科を学び続けている教員から、便宜的抽出法と層別抽出法を採用し、研究の参加への助言を求めた。

その際、同僚性など環境による資質・能力の形成要因を明らかにするため、一般公立校、公立研究指定校、附属学校を経験する教諭を対象として選抜した。また、各世代の考える小学校社会科教師の教科指導における資質・能力とキャリアステージによる資質・能力の形成要因の違いを調査するため、20代から50代の各世代の教諭を対象の候補とし聞き取りを行った。表1-1は、協力をしていただいた各教諭の属性要因を示している。A教諭以外は、小・中学校の経験を有している。なお本調査の聞き取り時期 10月~11月の2ヶ月で実施した。

表1 聞き取り教員の属性一覧

	世代	性別	経験校種	卒業大学	大学専攻
A	20代	女	一般公立校	国立	現代社会
B	30代	男	附属・ 一般公立校	私立・ 国立	社会科教育学
C	40代	女	一般公立校	国立	歴史学
D	50代	男	研究・公立校	国立	地理学

3.2. データ採取とデータ分析

データの採取には、対象者への面接による半構造化インタビューを用いた。本稿では、小学校社会科教師の考える社会科の目標やそれを踏まえた授業実践への考えを明らかにする量的データを測定するのではなく、教諭の語る言葉を中心とした質的データから小学校社会科教員の内実に向った。小学校社会科教師の資質・能力とその形成要因は何かというリサーチクエスチョンを設定し、現職の先生方の語りから背景の考え

を創出した。インタビューの際には次に示す通りインタビューガイドを設定し、参照しながら質問をした。

- ・年代、経験校(国立、公立、私立)、経験校数、職場での役割(主任、管理職)。
- ・出身大学、大学での専門科目。
- ・社会科での目標、子供たちに育みたい資質・能力。
- ・社会科の目標や育みたい資質・能力を踏まえた教材研究の工夫や留意点。
- ・社会科の目標や育みたい資質・能力を踏まえた授業の工夫や留意点。
- ・教科書・副読本の用途や使用頻度。
- ・過去現在における社会科の授業での困難や不安な点。
- ・社会科教師として成長を感じた出来事。

シナリオ作成においては、教師に必要な資質・能力とその形成要因についての先行研究等⁽⁸⁾から、インタビュー調査のための質問を設定と分析のための枠組みを検討した。調査実施・データ収集では、現職教諭にインタビュー調査をとおして、教育実践上の経験、社会科に対する意見や価値観、過去と現在の授業実践に関するデータを採取した。

その後、聞き取りデータを図・チャート作成、KJ法の使用による分析を試みた。カテゴリー化に際しては、各教諭のインタビューから重要となる発言を取り出し、より抽象的なカテゴリーに分類しまとめた。

分析では、発話者・テキスト・1次(コード)・2次(コード)という表を用いて分析を行った。また、カテゴリー化した情報と個別の情報を対比し、小学校社会科教師の特質や背景情報との関連を探った。

3.3. 現職教員による聞き取りの実際

聞き取りデータは採用一年目のA教諭を中心に、他の教諭の特徴的な部分を明示していく。

(1) A教諭の場合

A教諭の場合インタビュー記録から表出した、教科指導における資質・能力についてのカテゴリーは、図

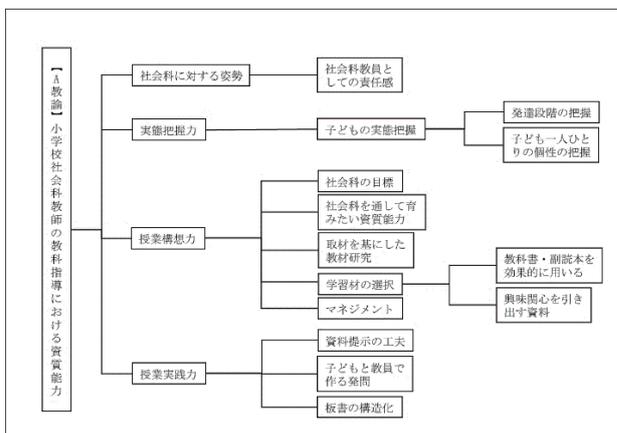


図1 A教諭のインタビューに基づく資質・能力の分類

1のように整理できた。

教師1年目のA教諭は社会科の授業をする上で、子供を第一に考えながら授業へと取り組んでおり、学習者の実態把握力が小学校社会科教師としての資質・能力として現時点で最重要であると捉えていることがわかる。また、授業の省察まで話が及ばない点も、初任として仕事を覚える入門期ならではの状況である。教諭の実際の発言を取り上げ、具体的に分析する。

① 実態把握力

A教諭は3年生を担任し、初めて社会科を経験する子供にとって、資料から読み取ることが精一杯なのではないかという実感している。社会科の内容は地域を知ることを重視しており、発達段階によって社会科の目標や教材や学習材を選択している。

A 21	本当に、3年生ということを見ると発達段階的には吟味なんて絶対できないし、取捨選択もできないから…どうなってほしいでしょうね。鶴呑みにはしてほしくないですね。
A 47	今、3年生ということを考えたら、地域に、地域のことをまず知った方がいいと思うから、別に副読本の内容をマスターできたらいいのではないかな。

※左枠は各教諭の発言の順番を表わすスク립ト番号、右枠は各教諭の発言内容を表わす。

子供一人ひとりの個性の把握については、以下のよう

A 29	やっぱり、誰もが出来てほしいので資料の読み取りとかを。机間指導の中で、何も取りかかれない子とかの所へ行って、まずさっきあった資料の見方の視点とかを、分かることを書くことはやらせるというか。まず誰にでもできるからそれをやらせて、自分にも一つはできるということで、価値づけはしています。
A 73	能力の高い子はたくさん自分の考えと今日のポイントまとめて書きますし、書けない子は書けないですね。

社会科を初めて経験する3年生の子供にとって、社会科を好き・嫌い、得意・不得意になる責任を感じつつ、子供一人ひとりの個性を把握しながら実態把握をすることの重要性を感じていることがその発言内容から分かる。

② 授業構想力

授業構想力についてのコードは、以下のよう

A 92	単元のゴールとしては、何個か挙げた工夫を説明できたらいいと思っています。
A 93	内容や要求が難しいのか、全然やれていないです。おそらく高学年とかであればできると思います。3年生で言えば、やるとしたらインタビューをしようぐらいだと思います。人に聞きたいことを聞いて、自分の疑問を解決しようとかであればできると思います。

A教諭の場合社会科授業の単元目標を、地域の人々とかかわりや説明することを重要視していることが分

かる。この目標は、実態把握力にもあったように、3年生という発達に即した授業内の工夫である。学年によっては、工夫を説明するだけの授業ではなく、社会に参画していけるような授業を組んでいきたいことも願いとしてもっていることが分かる。

また、社会科を通して育みたい資質・能力については、学習者への力の育成として資料の活用力の育成を挙げている。

A 11	まず3年生は社会が初めてなので、だから、突然資料とかもばんばん出てくるから、まずは資料の見方を身に付けさせたい。
A 21	鶴呑みにはしてほしくないですね。私もですが、選択というか、自分が見たものから、ただ表面上だけではなくて、そこから一步踏み込んで、今どう思うかとか、子供たちに、自分で考える力をつけてあげたいですね。

大学時代の授業作りの中で、社会科において資料の大切さを学び、実際に教師として授業実践を重ねる中で、子供に資料の見方を身に付けさせたいと考えている。教師自身も社会科で育みたい資質・能力であると語っている。資料を鶴呑みにし、表面的に捉えるのではないということからも資料を通した批判的思考の育成を目指していると考えられる。また、授業を構想していく上で、教師の取材を基にした教材研究については、以下のよう

A 65	社会科は足で稼ぐという風潮があるじゃないですか。それをやるのが正義だっていうのが今もあって、結局やっぱり実際そうしなければ、より身近には感じられないじゃないですか、子供たちは。より子供に感動とかそういうものを味わわせたいのであれば、資料を足で稼ぐっていうのは大事だけど、それはすごい時間がかかることだと思います。
A 80	やっぱり自分の足で資料を稼ぐっていうのが一步を踏み出せたのではないかなと思いますね。

教材研究を必要とする研究授業で行なった際、現地へ赴いて子供の实態に合わせたミクロな教材研究をすることが、実際に子供の反応に影響を与えていたと実感したことから、教師自身が社会的事象を理解するためにも、自分の足で取材をすることが大切であると感

A 42	やっぱり、3年生だったら地域の内容じゃないですか。なんか、どこかの曲がりネギみたいなのが載っているんです。農家の仕事として。子供たちは曲がりネギなんて全然身近じゃないし、そもそも岐阜のどこかもわからない。それでも副読本ですね。
A 43	他の先生は最終的に曲がりネギから、一般化するというか、そういうことをしていると思います。自分ではできていないですけど。

普段の授業では、副読本で授業を進めて、その理由

として、3年生にとっての興味・関心は身近な地域の社会的事象を扱うことで喚起されるため、教科書のような一般化された社会的事象は扱いづらいようである。半面、副読本だけでなく教科書を用いることで社会的事象の一般化は図られ、汎用性のあるものになることはわかっているが、その利用方法と教科としての目標の到達の難しさを感じている。また、副読本の資料の扱いについても、悩みつつ他者からの評価から、その作成について改善しようとする意識が芽生えている。最後に、社会科教師として、大学で社会科の授業理論を学んでいるが、理論と子供の実態との折り合いについては以下のように述べている。

A 87	別に理論が使えたからといって、その子供たちに当てはまるとは限らないです。まあ当てはめていくことが教師の力であると思いますが。結局は授業と一緒に子供と作っていくのがいいのかなと思います。まだわからないのですが。
---------	--

大学時代には、社会科の授業理論を学んでいるが、子供の実態との間でどのように授業構成をするよいかという悩みも伺える。授業理論を子供の学びの実態と重ねることが必要であるが、日々の仕事の中でその難しさも感じているようである。

③ 授業実践力

授業実践を展開する力について、資料作りやその活用力をどう育てようとしているか社会科教師としまし必要な部分を語り、そのうえでA教諭は一年目ならではの発問の必要性や難しさに苦悩を抱えていることも分かる。

A 12	具体的に何をしたかという、なにかレベル分けをして、一つ目が資料を見てまず分かることを書く、見てわかること。次に資料同士の違いを見つける。そして資料同士を繋げる。これとこれからこうわかるよっていうこと。だいたい最後だけ、前までに使った資料と繋げる。別にこれが正解と思ってないし、とりあえずこの感じで資料を読み取る力をつけられたらいいなって思っています。
A 33	ずっと平坦な授業をしてしまうので、子供の意見をスルーしてしまうことが多いですね。うまく子供の意見から広げられていないと思います。
A 34	社会科で深める発問とかは全然今取り入れることは出来ないですね。子供の発言を聞いて自分が事前には準備をしていなくて、ここで深い発問しようとかは考えられていないので、子供の発言でめっちゃめっちゃいいこと言ったなっていうのがあったらそこを深めるというか、うまくできないのです。
A 75	やっぱり問い返すことですね。発問と言うか問い返しですね。

授業では、子供の発言や意見から広げたり深めたりする問い返しをすることに力を入れているが、子供の発言や考えを広げたり深めたりする教師の問いかけが、社会科のねらいに迫るために重要な役割を果たすことは感じているようである。

また、発問と同様に、一年目教師として子供の発言や意見をどのように板書すればよいか、課題やまとめに繋がる言葉を端的にまとめることなどに難しさを感じながら前向きに取り組んでいることも語られた。A先生の話からは、大学時代に社会科教育を学ぶゼミに入っていたからそこ、授業実践力に対して前向きに資料の提示や発問、板書などまだできていないとしつつも、自らの教師としての資質・能力を総合的に向上しようとしている言葉が伺うことができた。

(2) B教諭の場合

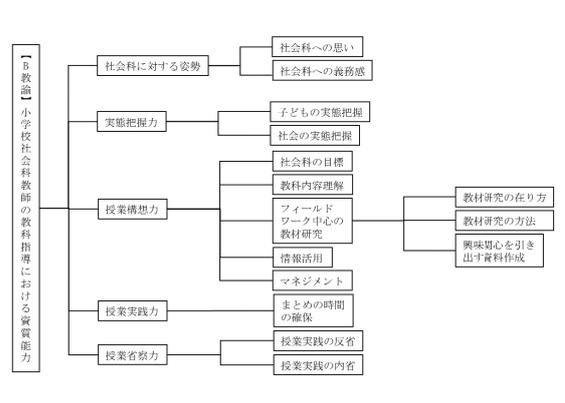


図2 B教諭のインタビューに基づく資質・能力の分類

B教諭は大学院を経て、附属学校で勤務をしながら日々の実践を務めた経験を持ち、附属学校という特殊性を反映した授業構想や授業実践力が特徴である。

① 実態把握力

教材研究と子供の実態が合っていない時の授業の感覚や自身の言葉が子供に伝わらない経験から、子供の実態の重要性を実感している。その上で、子供の生活経験を現実社会と繋げることが社会科には必要であり、文献を読むだけでは限界があるという。子供の実態にあった授業をするということは、実態を把握する力の成長とは教師自身が自覚して掴むものであり、経験値を高めるものであるとしている。

B 11	一生懸命勉強したんですけど、やっぱり子供はついてこなくてボロボロでした。子供の実態と全然合っていないような授業になっちゃって。自分としては、理論はすごく勉強して、教材研究も頑張ったつもりだったんですけど、やっぱり子供を活かしつつ、理論活用するという授業をするというのは非常に難しいということを日々、痛感していました。
B 29	今でも試行錯誤です。なんとなく子供の実態が見えてくると、あっ、こういうのが多分好きなのだろうとか、これはえらいなとかと感覚的につかめてきたと思います。感覚じゃ駄目なのかもしれないですけど、感じるものがあるんですよ。

② 授業構想力

附属教員として、学習指導要領や教科書を叩き台として授業を作っていかなければならないと自覚している。その使命を持ちながら教材研究をする上で、教師が面白いと感じる教材を見つけることが大切であるとしている。それだけではなく、その教材がねらいである社会的事象の概念や価値に迫るものでないといけなると述べる。そのためには教材がリアルな社会を示すものであるかを考える必要がある。

B 23	まだ、私自身なりきれていない自覚…戒めとしてもっていますが、やっぱり我々は附属教員という立場なので、指導要領の…これも大学の先生から教えて頂いたことなのですが、ユーザーでは駄目ですよ、メーカーでなければならぬという。教科書を教えるにしても、工夫がないと駄目ですよ。教科書でというか、それを一つのたたき台として、授業を作れる力をつけていかなければならない。
---------	---

	をイメージして作って、他の子は文章資料でいけるかなとか。取材の時も、その過程でクラスの実態に合わせて具体物を使おうとか、この子たちなら折れ線グラフでいこうとか、そういうふうに資料化するときに実態は結構意識します。
C 35	京都の油を、使用済みの油を集めたんですけど、ポリタンクとかも京都市役所で借りてきて、家の前にこんなタンクを置いてみんながみんな油を置いていくんだよって、ベタベタするし、火事になったらどうするのっていう意見もあったよ。とか言いながら。でも集めている人たちはすごいねっていうところから始めて、具体物とか話のもいっぱいあったので、子供たちの食いつきもよく、資料と繋げながら話していましたね。

このようにC教諭の場合、フィールドワーク-授業構想-実物資料化-授業実践は一つのストーリー展開であることがわかる。また、社会科が苦手な子供たちを視野において、興味・関心をもてるような実物資料作りは社会科教師として重要な資質と考えていることが伺える。

一方で、C41の発言にもみられる通り、研究授業用としても単元に沿ったフィールドワークがいかにも負担のかかることかということも自覚をされていることがわかる。

C 41	取材まみれで、たくさん取材するんですけど、授業に使えるのってほんの一部ですよ。本当にたくさんの情報量を児童の実態に合わせて、しかもねらいに合わせてここを使ってという精選の作業が本当に困難で、研究授業のためにやっていたら倒れちゃうなって思いながら…それが困難でしたね。
---------	---

(3) C教諭の場合

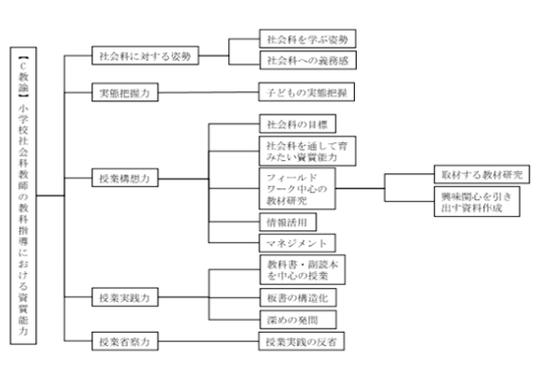


図3 C教諭のインタビューに基づく資質能力の分類

C教諭は公立学校で社会科研究を熱心に継続されてきた経験から、授業構想力や授業実践力を中心に語りが展開された。

① 授業構想力

その特徴は、教材研究では社会的事象を教材化するために漁港や消防署、病院などに取材を行ない、実物教材としての収集や地域の人々へのインタビューを行なっている行動力である。全て、社会科の授業で社会を子供が身近に感じることができるようになってほしいという社会科教師ならではの研究スタイルである。子供たちの興味を引き出す資料作成について以下のよう

C 30	この前も蜜蝋ペンっていうペンを開発した人を教材化しました。大田区の中小工場の方です。その方をお願いをして蜜蝋ペンで書いたものを取り寄せ、盲学校の先生にお願いをして目の見えない子は どうやって図形を書いているかっていうのを…専門の紙と実際の具体物を出すことで、苦手な子は具体物に触ってみて確かにこういうのがあると便利だ。目が見えない子のために開発して、すごい努力だ、信用できる。という風になるんです。この資料は苦手な子
---------	--

② 授業実践力

普段の授業において、中学年では副読本、高学年では教科書を中心に授業を実践していると述べている。しかし、教科書・副読本もただ読むだけでは境化ではないという意識されている。教材開発を理想としながらも教科書・副読本を中心にしており、時間的な余裕がある場合は、教材研究したものを単元や授業の中に取り入れることで授業実践にメリハリをつけることがマネジメントをする上で大切と語られている。また、副読本では地域についての特殊な社会的事象を学び、教科書で特殊な社会的事象を一般化することを目的としているのは、初任者であったA教諭との違いである。

C 33	基本私は教科書を活用しています。よく研究校の先生方とか、ご自分で単元を組まれて新しい開発をされるじゃないですか。そういった内容開発は、とても勉強になりました。だけど、実際に働きながら、教材研究ばかりに時間をかけられるのも中々厳しくて、さっき言ったような校務分掌とかもあって、難しいです。教科書を中心にして、そこに補足する感じで教材研究を深めると、少し命が吹き込まれていく感じになり、そういう応用で活用しますね。
---------	---

(4) D教諭の場合

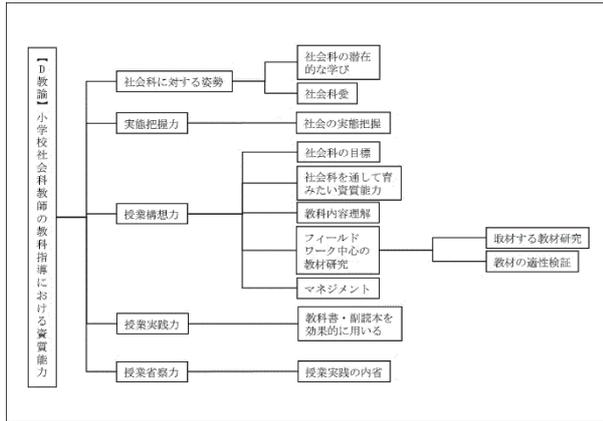


図4 D教諭のインタビューに基づく資質・能力の分類

社会科教育を通して、子供たちの成長を感じることも、社会科教師としての生きがいであると述べている。その背景に管理職になってからの教室や学校という捉えが、地域を中心とした社会へとより意識が広がっていることが伺える。社会科教師でありながら、同僚や地域の人々、保護者など共同体への貢献へ楽しみを感じ、生きがいとしている。D教諭自身、これまでの社会科を学んだ経験からくものと潜在的に思っており、社会科への愛着のような姿勢が重要となる。

D 9	20代30代の時はやっぱり目の前の子供達を考えて自分ができることは何か、社会科教育をはじめ自分が関わって子供たちがよくなっていく。自分が社会科教職員としての証というものを意識しながら、目の前の子供達が高まることを考えていました。だから目の前の子供達と同僚の先生方に頼られていく。これこそ社会に生きる、社会科教師としての価値がある。私も頼られ、何か貢献しているという喜びを感じ、間接的に子供達に社会を教えている喜びを得ました。40代から50代にかけて全ての先生方に社会科教育はじめ、教育を通して子供に還元していく。そして地域、保護者とか地域の方に声をかけ、声を聞きながら、あっ今こうして自分が何かに役に立っているということを生きがいにしてながら貢献できる。喜びを感じています。
D 17	社会事象を足で稼いで獲得していく。足で稼ぐ社会科でありたい。足で触れば、社会科の事象に触れば触れるほど愛着をもつもの。だから関われば関わる程、社会科教師は資料を通して、その事象について関わりを深く持つ。意味があるし、愛着があるし、意思がある。

4. 小学校社会科教師の教科指導における資質・能力と形成要因の関係

4.1. 資質・能力の向上の契機

各教員のインタビュー内容を基に、表出した資質・能力は、どのような契機で形成されているのかその要因の整理を試みた。契機としては大きく内的（校内での個人的立場も含む）・外的・社会的要因の3項目に

分けられ、それぞれ形成要因として表2のように整理できた。

表2 各教員の資質・能力形成の要因分類

	内的要因	外的要因	社会的要因
A	大学時代の教育	同僚	情報化
B	大学時代の教育 経験年数	研究授業 同僚 大学教員	学習指導要領 働き方改革 個人情報保護
C	大学時代の教育 経験年数 校務分掌	研究授業 研究会 同僚	学習指導要領 地域の実態
D	大学時代の教育 校務分掌 旅行や人との出会い	研究授業 研究会 同僚	学習指導要領 道徳 働き方改革 情報化 グローバル化

各要因の特徴的と思われる一例を示していく。

内的要因として特徴的なのは、50代のD教諭である。自身の立場が学校以外の職を経たことによって変化し、社会科教員としての自身の内面の変容を客観的に語られ、社会科教員を実施中の教師とは異なる見方や自分の影響を意識された感想を語られている。

D 32	社会科教員としては、ぶれはありません。ただ管理職としては、全職員のことを考えるので、やはりその社会科教育と同時に、全ての子供たちに教育を均等にレベルアップしていくことを考えることが増えてきました。その度合いは行政経験、指導主事を経て割合が高くなりました。より良い社会科教師が育つ、育つための政策ということを考えています。
---------	--

外的要因としてはB・C教諭の場合、研究授業や研究発表を契機として述べている。B教諭は附属学校職員という宿命もあるが、C教諭にとっても授業内容が子供や地域など置かれる環境に大きく依存する社会科授業では、研究会への参加は授業構想を多方面から学ぶ機会であり、研究授業は授業力を高める契機と自覚されていた。

C 46	自分としての成長・・・社会に関しては研究発表とかを自分で参加して学ばないですか。インプットです。アウトプットはできないので。やっぱり研究授業を受けたり、提案したりすると、やらなきゃいけないスイッチも入りますし、見られるからってということで成長の度合いも違いますね。研究授業は参加も、実施も大きな契機になります。
---------	---

社会的要因として、B教諭は附属教員として、学習指導要領の存在や社会情勢の存在の意識が語られた。学習指導要領の目標の到達を視野に入れ、新たな教材を用いて授業構想を提案することで、参観者と学習指導要領内での授業提案への配慮がうかがえた。それ以上に、取材等の教材研究に社会的要因が影響を始めている状況を、社会科授業づくりの困難さとして話された。

B 52	企業として秘密とか、知られたくないということもあるんですけど、今、情報の扱いが本当に厳しくなってきました。私が初任者の頃は結構お話していただくことができたのです。でも、働き方改革もあって、時間の制約ができて、勤務時間が終わってからとか、土日は受け入れてくださらなかったりして、今後も、教材づくりに向けて取材の制約という難しさがあります。
---------	--

このように社会科指導における資質・能力が、より細かく整理した要因との関連において、各教員がどのような意識のもとでいるか、その形成要因を表2のように整理をした。

表3 聞き取りで見られた社会科教師の資質・能力の形成要因

		内的要因				外的要因			社会的要因		
		私的		公的		学校内		学校外	社会		
		個人	家庭	実践経験	校内役割	研究授業	同僚	研究会	大学	教育界	社会情勢
A	姿				○						
	把			○							
	構	○				○	○				○
B	姿	○		○	○						
	把			○							
	構	○				○			○	○	○
C	姿	○				○		○			
	把						○				
	構	○		○	○		○	○			○
D	姿				○		○				○
	把	○		○						○	○
	構										○

※姿…社会科に対する姿勢、把…実態把握力、構…授業構想力、
 践…授業実践力、省…授業省察力として表わす。

各教員の語りの中で、形成要因が集中している重要な要因について、以下で考察を試みた。

4.2. 所属校という環境要因からの契機

同僚性に関する大きな違いは、附属校と一般校であった。附属校に所属するB教諭は、校内の社会科を専門とする同僚から、社会科教育そのものをどう考えるかという話しをする機会が多くある。それに加え、大学と協同した社会科授業について研究を行なっている。一方で、公立学校で経験を積む教師は、学校内の

同僚との繋がりが中心となっている。A教諭やC教諭は、同僚の教師から子供の実態について話し合うことで、自分の社会科の様々な点に気付くと語っていた。公立学校では、教科内容の捉え方や斬新な授業方法は、附属学校のように挑戦的な授業を実践するというから得られる契機の授業力は、高まりにくい環境と言える。反面、公立学校として欠かすことのできない子供たちとの学びの意義のなかに社会科教師として不易な部分が内在し、附属とは異なる側面で校内の多くの教師との関りから、その資質が育成されているともいえる。本来、もっと不易の重要性について社会科教師同士で語り合い、確認をする必要がある。

4.3. 研究授業という契機

所属校にもかかわるが、社会科授業の研究授業や授業発表の機会に違いが見られ、そうした機会が資質・能力を高める契機として大きいということである。教職一年目のA教諭から管理職のD教諭まで、授業力の高まりを感じた何らかの契機として、研究授業を挙げている。研究授業は、普通の授業とは異なり、より教材研究に時間を費やす。他教科とは異なりフィールドワークを教材研究の中心とする小学校社会科にとって、研究授業は大きな意義をもち、そのことについて、各教諭は以下のように語った。

A 80	あー、やっぱり今回の自分の足で資料を稼ぐというのが、人に授業をみられるからという意識の中で、一步を踏み出せたのでないかなと思いますね。
B 59	色々あるので具体的には挙げるのが難しいですけど、正直私も辛い。こういった研究校とかに来て研究授業とか、何度かさせて頂くじゃないですか。研究授業させて頂くと普段以上に教材研究のために、すごく情報もデータも集めますし、勉強もしますし、これに類似する実践はないかって探したりもしますし。それで臨む授業は普段とは違う。本当は違っている感覚はないと思うので。やっぱりそういうところの授業から得られるものって、正直たくさんさせて頂いた部分はあると思います。
C 46	やっぱそういう大きな授業を受けたりとか提案したりするとすると、やらなきゃいけないスイッチも入りますし、他者に見られるからっていうことでそれなりに資料とかも考えていかなきゃいけないってなる。やっぱり成長の度合いは違いますね。普通の授業をこなしているだけとは違うので。そういう大きな授業を受ける、研究発表をすると大きな契機になりますし。
D 28	色々なことを経験から客観的に教えてもらったり、この判断で良いのかという時にいろいろな研究授業があった場合になるほどと思ったりします。色々な方に教えていただいたりしながら自己分析しながら判断していく。

4.4. 成長の契機と自己矛盾

聞き取りを進めていく中で、B・C教諭はともに、現在の自分の授業に不安を感じているということをして口にしてきた。小学校で社会科教師として、教職年数を積み重ねる中で、社会科の授業を行うことへのスキルは身に付け子供理解と教材研究のためにかなりの時間を費やし、それらが子供の充実になることで資質・能力が形成されてきたと自覚されていた。そんな二人であっても、子供たちは少しずつ変化し、指導要領の改訂やICT化の進展、他の校内業務などから自身が経験してきたこれまで通りの実践を繰り返すだけで対応できていないのではというジレンマはどこかで抱いているとのことである。

さらに、社会では退職後の個人の時間も豊かにすることが求められる働き方改革も浸透し始めている。これまで成長の契機であった、放課後の教材研修や同僚との会話等が、今後も同じように契機であり続けるか不明であり、経験や年齢からも伝える側になったB・C教諭も若手教諭への接し方を探らないといけない状況のようである。現場での働き方と学び方のマネジメントが今後はより必要となっていることであろう。

重要となるのが授業省察力である。B・C教諭は、社会科を専門とする同僚に恵まれた環境で、授業について省察ができ、その力が高めやすい環境にあった。小学校教師の場合、学校内に社会科を専門とする教師がいない場合も多い。自ら研究会や学会などに出向いて、授業の構想や実践の新たな取り組みの契機にする必要があるだろう。

ただし、先にも述べた通り、今後は教師個人の生活の充実を目指す風潮は止まらないであろう。時間外だから、社会科も教科書でやればという意識だけが高まれば、社会科教師としての資質・能力そのものが縮小しかねない。教材研究について学んだり見つめ直したりする場を、学校や教育委員会などが創り出さねば、資質・能力の向上の契機さえ喪失しかねない。

5. おわりに

小学校の社会科教師を対象と聞き取りから改めてわかることは、学習者である子供たちが社会科を学び始める8歳から12歳という幅があるため、発達段階を踏まえた子供個々の学びの把握を重要視しているということである。社会科の場合、教科史的な側面からみても、子供の学びを重視する傾向にある。今回改めて学習者の実態を把握する力が、小学校社会科教師に語り継がれていることが分かった。そのため小学校社会科

教師の教科指導における資質・能力としては、単に授業に関わる社会に対する姿勢・授業構想力・授業実践力・授業省察力だけでなく、実態把握力を加えた5つで整理しなければならない。

また、小学校社会科教師の教科指導における資質・能力の形成要因としては、研究授業が挙げられた。小学校教師は、社会科に専念することは難しい。そうした状況で、研究授業は時間を確保して教材研究に取り組むことができ、教師の資質・能力を伸ばす重要な契機となっていた。キャリアステージが上がるにつれ、授業構想力や授業実践力を高める契機から授業省察力を高める契機へとその形成要因は拡大している。

一方で、教師の内面では経験年数が上がれば全て資質能力で解決されるということではなく、社会の要請や子供の変化に対応する悩みも、個人内に潜ませながらその資質を常に向上させるしかないことも、今回のインタビューの貴重な成果であり、その改善は今後の重要なテーマである。

【引用・参考文献】

- (1) 文部科学省中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』2021
- (2) 「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について ～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の構築～（中間まとめ）』2022
- (3) 文部科学省 中央教育審議会『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～』2015
- (4) 文部科学省 中央教育審議会答申『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』2012
- (5) <https://www.gifu-net.ed.jp/ggec/wp-content/uploads/sites/4/2021/11/953fe145a7aac418ce6b0533eef9d152.pdf>
- (6) 中田正弘「小学校教師が求める資質能力に関する考察—3世代教師の意識の共通と差異をもとに—」, 帝京大学文学部教育学科紀要 34, 2009
- (7) 岩田康之, 別惣淳二, 諏訪英広『小学校教師に何が必要かコンピテンシーをデータから考える』東京学芸大学出版会, 2013
- (8) 鈴木淳子『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版, 2005
- (9) 秋田喜代美, 編著 藤江康彦『これからの質的研究法 15の事例にみる学校教育実践研究』東京図書, 2019
- (10) 岩田一彦『社会科授業研究の理論』明治図書出版, 1994
- (11) 山崎準二『教師のライフコース研究』創風社, 2002